

アトリエの印象

岸田國士

青空文庫

私は巴里滞在中、二三の画家諸君と識り合ひになり、ちよいちよいアトリエを訪ねるやうなこともあつたが、いつでもその仕事振り、生活振りに多大の興味を惹かれた。

第一に、いかにも楽しさうに仕事をしてゐる。母親が娘に晴着を著せてゐるやうだともいへるし、子供がお土産に貰つた寄木細工を弄んでゐるやうだともいへ、或はまた、酒飲みが晩酌の膳に向つたやうでもあり、善良な夫が細君の独唱を聴いてゐるやうでもある。

第二に、訪問者の相手をしながら、平気でカンワスに向ひ、それでさほど煩はされもせず、訪問者も一向退屈しないといふことである。これは人によつても違ふのだらうが、さういふところは、われわれ原稿紙に向つて字を埋めて行く商売とは甚だ隔りがある。

——どうだい、この絵は……

——面白いね。

話は甚だよくわかる。われわれの方では、さうは行かない。

——今、一寸したものを書きかけてるんだ。

——どこへ出すの？

——頼まれたもんだから、仕方なしに書いてるんだ。方面違ひの美術雑誌さ。

——へえ、脚本かい。

——ううん、なんでもいいつて云ふから、なんでもないことをだらだら書いてるんだ。

——随筆だね。随筆の筋なんてものはないかもしれないが、一体どういふことを書くつもりだい。

——書いて見なければわからんよ。

.....

結局、話題を他に移すより外はない。実際われわれが机に向つてゐるのを、人は手紙を書いてゐるくらゐにしか思はないらしい。その証拠に、少し待つてくれと云ふと、五分も待つてば十分だといふやうな顔をしてゐる。

第三に、絵に描く対象をすぐ、自分のわきに置いておくといふことである。それが美しいモデルなんかだと、一層面白い。この美しいモデルといふものは、どうして画家の専有物なのか。われわれだつて、ああいふものを傍らに侍らしておいて、それから必要なインスピレーションを受けることはちつとも差支ないと思ふが、どうだらう。一人の小説家なり戯曲家なりが、ある女性に興味をもち、その美しさを「描く」ために、彼女を自分の書齋に閉ぢ込め、毎日時間をきめて、その肉体と精神の「姿態」を観察するとしたら、世間

はなんと云ふだらう。よしんば、彼女を一度も裸にしなくても、これは「問題」となるに違ひない。

私はある画家のアトリエを久しぶりで訪ねたが、その画家は、新しいモデルを手に入れたばかりのところで、大いに上機嫌だった。彼はそのモデルを前において、あらゆる讃嘆の言葉を放った。それは半ば私に聞かせるためであり、半ば彼女に聞かせるためである。或は、さう考へるのが既に私のお目出度いところで、実は、私の耳を通じて、その讃辞の悉くを彼女の耳に伝へてゐたのかもしれない。

私はそこで、この一組の男女が——画家なる男とモデルなる女とが——いかなる関係なればこそ、かくも同時に、幸福であり、得意であり得るかを疑った。

第四に、自分の描いた絵を、一々、壁にかけて置いて、朝な夕な、煙草を吹かしながらそれを眺め暮せるといふことである。

なるほど、文士の書齋には、自著が行儀よく、本棚の中で背中を並べてゐるかもしれない。しかし、背皮の標題が語り得る範囲は、極めて狭く且つ漠然としてゐる。

ある画家はかうも云つた。——自分の絵が永久に自分の手許から離れて行く気持は淋しい、と。それには同感できないこともないが、その気持は、また考へやうによつて、なか

なかロマンチックでいいではないか。自分の本が、二足三文で夜店に晒されてゐるなどはあんまり散文的だ。

余談になつたが、われわれが自作を読み返す興味は、殆ど一つの努力に等しい。これに反して、画家は、さういふ努力なしに、過去の仕事を刻々振り返つて見ることができ。そして、自分の歩いて来た道を絶えずはつきりと見きはめ、そこからいろいろな刺戟と、慰藉と、希望とを汲みだすのだ。

画家のアトリエにはひつた時、われわれは、その家の主人を画家として以外に見ることができない筈である。つまり、雑談の間にも、一度は「絵の話」がでる。「彼の絵」がさうさせるのである。ところが文士の書齋は、時には、実業家の応接室と選ぶところなく、温泉場の碁会所と選ぶところなく、停車場の待合室と選ぶところがない。「彼の本」は、実際背中を向けたままであるからである。

私はある時、初めて識り合ひになつた画家に伴はれて、深夜そのアトリエにはひつたところがある。屋根裏の薄暗い部屋である。私たちは、話に夢中になつて、その日、夕食を食ひ損つたのである。その画家はアトリエの一隅で、アルコオル・ランプに火を点け、米の飯を焚き出した。茶めしを御馳走しようと云ふのだ。私は空腹を抱へて飯のできるのを待

つた。やがて、醤油の煮える香ひがしだした。巴里で嗅げば、これもノスタルヂヤの種だ。

——さあ食ひ給へ。

その後は、どんなことを話したか覚えてをらぬが、それから一年もたつてからのこと、その画家は私に向つて、面白いことを云つた。

——君がはじめて僕のアトリエに来た時、壁といふ壁にあんなにかけてあつた僕の画を見て、お世辞にでもなんとか云はうとしない無頓着振りには、全く感心したよ。それより第一、絵かきのところへ来て、絵がそこにかけてあることさへ気がつかないやうなんだ。

——腹がへつてたからだらう、きつと。

——いや、飯を食つてから後でもだ。

——腹がふくれたからだよ、それや……。

……………

こんな冗談にまぎらはしたものの、私は内心、画家を友にもつ資格のないことを恥ぢた。

私が最も驚異の眼を見はつたのは、ある友人に連れられて、モン・パルナスの某画塾を見に行つた時である。男女数十人の研究生が、モデル台に立つた一人の男を——丸裸の男

を写生してゐた。モデルといふ職業も、人事ながら容易でないと思つたが、まだ日本なら肩揚げ取れないほどの少女たちが、顔も赤らめず、「裸の男」を忠実に「頭から足の先」まで写生してゐる有様は、全く見てゐて、こつちの顔が赤くなるやうな気がした。かういふ場合に、かういふ感情を起すことが抑も「絵を描かない人間」の悲しさだらうが、それにしても、「絵を描く人間」は、そんなに、肉体といふものに対して、特別な観方、感じ方ができるのだらうか。できなければいけないのだらうか。私は少し憂鬱な、同時にまた滑稽な気持でその画塾を出た。

もう一つ不思議に思つたのは、これもある友人のアトリエで、私のふと目撃した「事件」についてである。

それまで神妙にポーズをしてゐたモデルが、休息の時間を与へられると、いきなり部屋の隅の洗面台の下から、大きなバケツを引っぱり出し、その上に跨がつた。何をするのかと思つてゐると、こつちが眼を反らす暇もなく、鼻唄なんか口吟みながら、悠々と用を足しはじめたのである。これくらゐ、てれくさい話はない。私は友人の顔をちらと見たつきり、窓外の緑に眼を転じて、つらつら美術の精神について考へた。

モデルが帰つたあとで、私はこの友人の口から、「ああいふ女」が好きだといふ話を聞

かされた。

なるほど、「ああいふ女」が好きである美術家に、私は一応敬意を払ひたい。なぜなら、それによつて、私の感情の古めかしさを教へられたからである。実際、さういふところに、アトリエの新鮮さがあると、私は常に感じてゐる。（一九二七・一二）

青空文庫情報

底本：「岸田國士全集21」岩波書店

1990（平成2）年7月9日発行

底本の親本：「時・処・人」人文書院

1936（昭和11）年11月15日発行

初出：「アルト 第二号」

1928（昭和3）年6月1日発行

入力：tatsuki

校正：門田裕志

2007年7月2日作成

2016年5月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

アトリエの印象

岸田國士

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>